

もっとあそび隊

日本財団「平成 28 年度（2016 年）熊本地震 NPO・ボランティア活動支援事業」
記録集



子どものあそび研究会

もくじ

1 子どものあそび研究会とは？……2

①「もっとあそび隊」の結成について

②活動の目的

2 「もっとあそび隊」概要……3

3 事業評価……4

①事業によって得られた成果

②成果が得られた要因

③課題

4 もっとあそび隊 活動一覧表……5～6

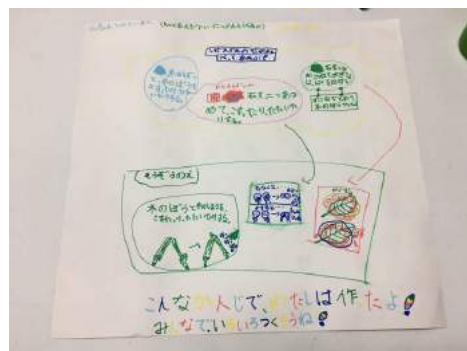
5 初期の活動報告(4月23日～5月9日)……7～16

6 西原村での活動報告(6月23日～1月28日)……17～21

7 春日校区での活動報告(9月26日～3月27日)……22～28

8 尾ノ上校区での活動(1月25日～2月8日)……29～31

9 スタッフまとめ……32～34



1. 子どものあそび研究会とは？

表現あそびの中で、相手と関わり合い、自分自身の面白がる力で「今」をつくりかえていける！という実感こそ、子どもたちの育ちに欠かせないことだと考えて活動している。活動内容は、月に1回定期的に研究会を開き、実践の報告から表現あそびの中にどのような力が子どもたちに育まれるのかを検証している。活動メンバーは、小学校教諭・放課後学童クラブ・保育士・民生委員など、職の垣根を超えた実践活動を行っている。

①「もっとあそび隊」の結成について

地震後、4月と5月の定期活動は中止せざるを得ない状態が続いた。その中でも、動ける範囲で、動けるメンバーで、避難所になっているところに表現あそびを届ける活動を続けた。6月にやっと定期活動を再開でき、その避難所での活動報告から、あそびの中で、いかに子どもたちが思いを外に表出することが出来、また今こそこのあそび活動が日常の中で必要なのではないか、と話し合う機会があった。避難所活動の中では、あそびの中で子どもたちが生き生きとすることによって、大人も元気をもらっていることも再認識していたこともあり、よりその場を届ける必要性を実感していた。そこで、より日常の放課後に、子どもたちにとって、生き生きできる場である「あそび」を届けにいくために「もっとあそび隊」の結成に至る。

②活動の目的

- ・子どもの感情や体力の発散ができるあそびの不足を解消する。
- ・子どもたちが自らあそぶ力によって、自分自身の「安心」を取り戻していくこと
- ・仲間と安心して、「今」を工夫し、自分たちのあそび心で作り替えていける実感を持つこと。

上記の目的のため、もっとあそび隊でのプログラムは、「あそび」の中で、

- ①子どもたち自身が意見を発揮出来る内容である事
 - ②イメージ世界の中で日常の景色がいつもと違って見えてくる創造性がある事
- 二点をプログラムの中心に取り入れることを意識する。



2.「もっとあそび隊」概要

- ・関わるスタッフは、事前打ち合わせと、表現あそびについての学びをする。
- ・地震直後の活動… 9回(合計参加者数 249 名、うち 3 回を助成金活動とする)
- ・西原村(文化創造館「風流」を中心とする)… 4 回(合計参加者数 98 名)
- ・春日小校区(学童ほいくおかえり)… 11 回(合計参加者数 162 名)
- ・尾ノ上小校区(尾ノ上地域コミュニティセンター)… 2 回(合計参加者数 36 名)

広報の方法

- ・チラシによる広報(チラシ 2,800 部作成)各小学校、地域への配布
- ・インターネットによる広報(もっとあそび隊 Facebook を活用)
- ・日本財団「今できること」サイトによる広報と報告
- ・事業の内容報告書を 200 部作成ののち、関係者等への配布

開催期間 2016 年 4 月～2017 年 3 月



3. 事業評価

①事業実施によって得られた成果

あそびの中で「地震の時はね」という言葉が何気ない瞬間にぽろっと出てくることがあったり、1月の活動時に小学校に避難している時に会った兄弟が「あの時すごく楽しかった！」と会いに来てくれたりする中で、子どもたち自身が「安心できる場」として認識されていることを感じた。

このあそび活動を放課後に設定することで、子どもたちの日常に自分自身も気がつかないような「怖さ」をケアする機会にしたい思いがあった。放課後の子どもたちが、嬉しそうに公園に集まってくる様子や、学校の宿題で「地域にあるお店などの人たちを取材して、発表する」というもので、「もっとあそび隊」を取材して発表してくれた。そのことは、大人が設定した活動ではあるが、子どもたちの身近な活動として認識していることの成果と感じている。

また、地域の大人の方たちからも応援の声が届き、学校、地域の大人、習い事の先生などが実際に活動に関わることは少ないが、快く子どもたちを外に送りだしてくれたり、チラシの配布に協力して頂けたりした。

②成果が得られた要因

活動中で、自分たちの思いを安心して表現する場づくりとしてとても定着した。

その要因としては、毎回テーマ(例「鬼ごっこ」)などはあるものの、その中で「今日はこんなことをやってみたい!」と、その場にいる人、その場にあるもの、を工夫して仲間と対立、葛藤、共感、達成を繰り返していくことが子どもたち一人一人が表現をすることを怖がらず、また、相手の表現も受け止められる場になった。

また、そのような場にしていくためには、その場を作る大人の視点と働きかけに専門性が必要なことは当たり前で、場を作る仲間との学びも深められた。その学びがあることで、より「もっとあそび隊」での子どもたちへの働きかけが変わった。子どもたちが「自己発揮」を繰り返すことが、心身のケアにつながるということを基盤に、この「もっとあそび隊」に関わった大人がまた自分たちの地域でこの実践の核をもとに活動して行って欲しい。

③課題

放課後活動、ということの中で、子どもたちの日常生活との折り合いが難しく、参加者の人数集めに苦労した。

西原村は、学童さんに協力をしてもらえたので、より多くの子どもたちに活動を届けることができたのだが、市内の活動の場合は公園をベースにしているので、そもそも0の人数からになってしまうところが第一の要因になってくると思う。しかし、その中でも新しい関わりが生まれたり、子どもたち同士が、もっと参加者が増えるような声かけをし続けてくれたのは活動としては充実していた。今後、もっと活動の様子を広めていきたい。

4.もっとあそび隊 活動一覧表

初期活動(4月23日～5月9日)

NO	日付	活動場所	時間	スタッフ数	参加者数
①	4/23	春日小学校	11:00～12:00	2名	子ども6名 高校生3名、大人3名
②	4/25	春日小学校	11:00～12:00	2名	子ども8名 高校生2名、大人5名
③	4/25	五福小学校	14:10～15:10	2名	乳幼児親子5組 子ども23名 大人7名
④	4/28	尾ノ上小学校	10:30～11:30	7名	乳幼児親子3組 子ども25名 大人13名
⑤	5/2	五福小学校	15:00～16:00	3名	子ども19名 大人10名
⑥ 助	5/4	尾ノ上小学校	10:30～11:30	4名	子ども21名 大人8名
⑦ 助	5/4	慶徳小学校	14:00～15:00	5名	子ども10名 大学生1名
⑧	5/6	詫麻原小学校	11:00～12:00	5名	子ども24名
⑨ 助	5/9	帯山西小学校	10:30～11:30	4名	子ども35名 大人10名

西原村での活動(6月23日～1月28日)

NO	日付	活動場所	時間	スタッフ数	参加者数
⑩	6/23	西原村役場 「山河の館」	10:30～11:30	3名	乳幼児親子7組
⑪	11/12	有機生活	15:00～16:30	3名	幼児5名、小学生11名 大人4名、お店の人4名
⑫	12/7	河原小学校学童	16:30～17:30	3名	子ども27名 職員3名 (富山ボランティアの人 1名)
⑬	1/28	文化創造館「風流」	16:30～17:30	3名	子ども20名 大人 8名

春日校区 かぼちゃ公園での活動(9月26日～3月27日)

NO	日付	活動場所	時間	スタッフ数	参加者数
⑭	9/26	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～17:45	3名	子ども15名
⑮	9/27	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～17:45	3名	子ども12名
⑯	10/4	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～17:45	3名	子ども12名
⑰	10/5	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～17:45	3名	子ども15名
⑱	11/14	りんどう公民館	15:30～16:45	3名	子ども16名
⑲	11/15	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～16:45	3名	子ども12名
㉔	1/5	おかえり～ かぼちゃ公園	15:00～16:30	3名	子ども16名
㉕	1/6	おかえり～ かぼちゃ公園	15:00～16:30	3名	子ども21名
㉖	2/6	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～16:45	3名	子ども15名 青年1名
㉗	2/7	おかえり～ かぼちゃ公園	15:30～16:45	3名	子ども15名 青年1名
㉘	3/27	おかえり～ かぼちゃ公園	15:00～16:30	3名	子ども10名 青年1名

尾ノ上校区 錦ヶ丘公園での活動(1月25日～2月8日)

NO	日付	活動場所	時間	スタッフ数	参加者数
㉙	1/25	尾ノ上コミセン～ 錦ヶ丘公園	15:30～16:45	3名	子ども15名 大人3名
㉚	2/8	尾ノ上コミセン～ 錦ヶ丘公園	15:30～16:45	3名	子ども14名 大人4名

5. 初期の活動報告(4月23日～5月9日)

関わったスタッフ数 のべ 34 名
のべ参加者数 249 名

(内訳)

子ども のべ 179 名
高校生のべ 5 名(地域のボランティア)
大学生のべ 1 名(地域のボランティア)
大人 64 名



地震直後は、ライフラインの確保に非常に忙しい日々だった。水が出ない地域がかなりあったので、声を掛け合いながら、入浴など地域での助け合いが多く見られた。避難所を見に行ってみると、夜眠れない人が多いため、昼間横になられている方が多く、子どもたちは遠慮しながら遊んでいる様子が見られた。このままではゲームやネット動画での時間があまりにも多くなるのではないかという懸念があった。まだまだ余震も多くある時期ではあったが、もとより関係のある方たちが避難所運営などにも携わっておられたので、その方々に声をかけ、あそびを届けに行くことができるようになった。

子どものあそび研究会のメンバーも、被災しており、スタッフ確保のため、研究会以外でスタッフとして入ってくださったのは、「熊本県子ども劇場」のメンバー、「放課後学童クラブおかえり」、「東京学びの会」の熊本出身のメンバー(帰省時にスタッフとして参加)の皆さん。

「もっとあそび隊」活動報告①

春日小校区 春日小学校プレイルーム(地震後、開設)11:00～12:00

活動日	2016 年 4 月 23 日		
参加人数	子ども 6 名 高校生 3 名 大人 3 名	スタッフ数	2 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①集まったみんなで輪になり座る</p> <p>②自己紹介(スタッフ側の)</p> <p>好きな食べ物を食べている表現をして、何の食べ物が好きか当ててもらおう。</p> <p>③ほぐしあそび</p> <p>よばれてとびでてでジャジャジャーン</p> <p>(集まった全員にスポットが当たるようなテーマで、テーマに合う人が真ん中を通して違うところに座る)</p> <p>(昭和生まれ・平成生まれ・16 日の地震の時に、起きなかった人など)</p> <p>④折り紙宝探し</p> <ul style="list-style-type: none">・2チームに分かれる・お互いのチーム、赤と緑色の折り紙を10枚ずつ配る。・各チーム10枚を部屋に隠し、お互いに探し合う。・見つけた折り紙を好きなだけ破って隠す。(赤 82 枚、緑 62)・ちぎった折り紙を花火のように打ち上げて遊ぶ。(掛け声) <p>3・2・1「世界が明るくなりますように！」</p>		<p>①～③</p> <p>最初に部屋に入ってくると、大人にくっついてみたり、突然突き放してみたりする様子が見られた。(年長児)</p> <p>他の子どもたちとの様子を見ながら部屋にいる子どもたちがだんだん輪に入ってくる感じだった。</p> <p>④</p> <p>最初は、1枚を3枚に分けて隠すよう、声かけをしていたが、子どもたちのたくさん破きたい！という様子から、満足するまで破いたものを部屋に隠しあった。</p> <p>花火は、提案すると「いいね～」と、細かく破いた折り紙を、さらに細かく破き、打ち上げの声かけは何にする？と提案すると、すぐに「世界が明るくなりますように！」という言葉が返ってきた。</p>	
スタッフ感想	・地震後初めてのあそび活動で、こちら側も緊張していたけれど、子どもたちが笑うことで、大人も安心することがわかった。		
まとめ	・子どもたちの様子から、地震後からの不安、怖さが表に出てきていることを感じた。あそびの中に少しずつ地震のキーワードにも触れることで、経験を昇華していけるよう工夫していきたい。		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告②

春日小校区 春日小学校プレイルーム(地震後、開設)11:00～12:00

活動日	2016 年 4 月 25 日		
参加人数	子ども 8 名 高校生 2 名 大人 5 名(周りで見ていた人含む)	スタッフ数	2 名
活動内容		参加者の様子	
<p>①集まった子どもたちと座る</p> <p>②自己紹介(こちら側の) 昨日からのメンバーと 紙芝居のぐれっちゃんの紹介</p> <p>今日は、紙芝居を見る！ということで、ほぐしに入る</p> <p>②ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し 聞く→小さくなる声・</p> <p>③動いて遊ぼう 見つけてタッチ (テーマのものを素早く見つけてタッチ) ・集まったみんなで5秒で一つの輪を作る。 ・発信</p> <p>④紙芝居 「どんぐりお化け」シリーズより 2 作品</p>		<p>①～② 連日で遊び活動をさせていただいたので、子どもたちも「また来たの!？」と言いながら、昨日よりも最初から安心した空気感で遊び始めた。</p> <p>③ 動くのはとても好きな様子。瞬発的に止まる・動く、の繰り返しが安定にもつながっているように感じる。</p> <p>④ 集中して、「あぁだ」「こうだ」と、隣の子とも同士で面白がっている様子があった。</p>	
スタッフ感想	・紙芝居をたくさん笑いながら見てくれたことで、こちらもとても楽しかった。 ・遠巻きにいた大人の人、少しずつ遊びにも入ってきて、子どもたちへの活動ではあるが、大人も巻き込めたのが良かった。		
まとめ	・動いた後に、落ち着いて紙芝居を見る、という楽しみの中で、一つのところに安心して座っている、ということが意識せずにできたのが良かった。継続していきたい。(写真を撮る余裕がなく、反省)		

(写真)2名とも活動の主に入ったため記録写真なし

「もっとあそび隊」活動報告③

五福小校区 五福小空いている部屋をお借りして 14:10～15:10

活動日	2016 年 4 月 25 日		
参加人数	乳幼児親子 5 組 子ども 23 名 大人 7 名	スタッフ数	2 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①集まった子どもたちと座る</p> <p>②自己紹介(こちら側の) 昨日からのメンバーと 紙芝居のぐれっちさんの紹介</p> <p>今日は、紙芝居を見る！ということで、ほぐしに入る</p> <p>②ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し 聞く→小さくなる声・</p> <p>③動いて遊ぼう 見つけてタッチ (テーマのものを素早く見つけてタッチ)</p> <p>④紙芝居 「どんぐりお化け」 シリーズより 2 作品</p>	<p>紙芝居のぐれっちさんが、五福小学校の周辺で路上紙芝居を定期的に行っていることで、子どもたちにも顔なじみが多い。また、紙芝居ということで、乳幼児の親子も多く参加があった。</p> <p>①～③ 紙芝居を見に来ている子どもたちが多かったのも、最初は、遊ぶの？という感じではあったが、動いているうちに楽に色々な表現を楽しみ始めた。</p> <p>④ 「俺これ知ってる！」など、日常で見たことのある紙芝居を楽しんでいた。ほっとする様子が見られ、大人も安心して見る姿があった。</p>		
スタッフ 感想	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の中で、出会ったことのある子どももいたので、より身近に感じた。 ・何があっているのかが分かりやすいことで、紙芝居を見にくる人が多かったことが良かったように感じる。 		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている人が来ることでの嬉しさや、安心感を感じた。 ・自分自身たちもそうだが、やはり地震前に経験した日常の一つが近くにやってくることで、とても安心するのだろう。 		

(写真)記録写真なし

「もっとあそび隊」活動報告④

尾ノ上小校区 空いている部屋をお借りして 10:30～11:30

活動日	2016 年 4 月 28 日		
参加人数	乳幼児親子3組 子ども 25 名 大人 13 名	スタッフ数	2 名
活動内容	参加者の様子		
①集まった子どもたちと座る ②自己紹介(こちら側の) 子どもたちとの関係づくり。安心して声を出せる環境づくり。 ・3人姉妹の何番目でしょう？ ・大好きな食べ物は何でしょう？ (食べている表現) ③ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し (1回目大人、2回目子ども) 聞く→小さくなる声 ④動いて遊ぼう 見つけてタッチ よばれてとびででジャジャジャジャー ⑤折り紙宝さがし	普段、絵本の会が開催されている小学校にて、絵本の会の方につないでいただいて、遊び活動を行うことができた。 ①～③ 地震前から知っている子どもたちも参加してくれたことで、避難している人たちをたくさん誘ってきてくれた。 あそびが始まり、「よばれてとびででジャジャジャジャー」の中で、地震のこともテーマに出しながら、子どもたちから自然と言葉が出てきた。「家はまだ入りたくない」など、深刻な言葉もあるが、遊びの中だからこそ、明るい声で発言していた。 ④⑤ 思いっきりできる、ということがやはり楽しい様子。「あ～面白いね！」という言葉が出てくる。		
スタッフ感想	・なかなか思い切って体を動かせるタイミングがないので、集中して遊ぶことがとても大切なことを感じた。		
まとめ	・継続でいけるように手配を組んでもらう。 ・子どもたちが遊ぶ機会があるということ(どうしても他の方に遠慮して、テレビゲームになりやすいので)を何かしらの方法で伝えていく工夫をしていきたい。		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑤

五福小校区 五福小 体育館にて 15:00～16:00

活動日	2016 年 5 月 2 日		
参加人数	子ども 19 名 大人 10 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①自己紹介(こちら側の) 昨日からのメンバーと 紙芝居のぐれっちゃんの紹介</p> <p>②ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し (途中から前に活動していたお笑い芸人さんたちと 一緒に) ※1 回目→2人で 2 回目→お笑い芸人さんと5人で</p> <p>③紙芝居 「どんぐりお化け」 シリーズより 3作品 「大人紙芝居」 1作品</p>	<p>ゴールデンウィークということで、たくさんボランティアさんが入ってきた。娯楽の部分でも多くのボランティアさんがいらっしゃる。体育館に行くと、福岡で活動しているお笑い芸人さんが先にパフォーマンスをしておられたので、その後から遊びの時間にさせていただいた。</p> <p>①～② 前回参加していた子どもたちもいて、すっかり客席のような安心した雰囲気で遊んだ。途中から芸人さんも参加してくださり、子どもたちともたくさん喋りあいながら遊んだ。</p> <p>③ 体育館だったので、大人の方も多く、客席には座らない様子でも、遠巻きに見ておられる方もおられた。</p>		
スタッフ 感想	<p>・(東京から1名)熊本の様子を知ることができて安心した。</p> <p>・芸人さんが最初にパフォーマンスをされていたので、遊ぶ雰囲気になるかどうか、少し心配だったが、結果的にそのことが生かされて、娯楽としての雰囲気がしっかりあったのが良かった。</p>		
まとめ	<p>・ボランティアの活動は、それぞれでの動きになりやすいが、今回のように、急遽であっても手をつなぎあえるのは遊びの魅力の一つだったように感じる。</p>		

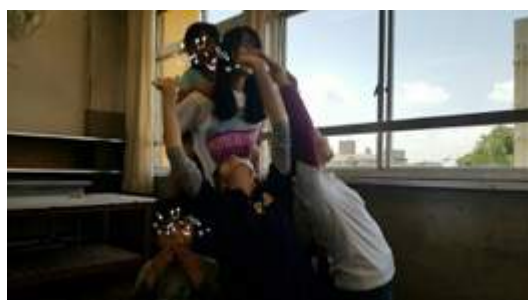
(写真)記録写真なし

「もっとあそび隊」活動報告⑥

尾ノ上小校区 空いている部屋をお借りして 10:30～11:30

活動日	2016 年 5 月 4 日		
参加人数	子ども 21 名 大人 8 名	スタッフ数	4 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①集まった子どもたちと座る</p> <p>②自己紹介(こちら側の) スタッフメンバーたちの名前を当てる。 本物は誰だ？(水を飲んでいる人は誰？)</p> <p>③ほぐしあそび (アコーディオンを出す) ♪パンとご飯(二つのテーマから好きな方を選んで集まる) 犬と猫 お寿司と天ぷら 歩くと走る 好きな季節(春夏秋冬)→4つのチームになる</p> <p>④チームであそぶ 7秒変身(体をくっつけあったりしながら、チームで一つの表現をする)※テーマ「山」とか「蛇」など、全体で一つのテーマ。 最後のテーマは 「熊本城」に変身した。</p>	<p>①～③ 前回からの子どもたちと、今回からやって聞きたこと混ざりあいながらあそぶ。 ③では、どちらも好き、や、どちらでもない、子どもたちが、新たに真ん中に集まるスペースを作ったりして、遊びの展開があった。 提案して、それがみんなに認められる安心感が生まれてきていたように思う。</p> <p>④ 体で表現することがだんだんと恥ずかしくなくなって、みんなで面白がる様子。 お城の表現では、みんな壊れていないお城を表現した。</p>		
スタッフ感想	・連日の報道で、壊れてしまった熊本城を見ていたが、ここでの表現はやはり壊れていない熊本城が表現されたのが印象的だった。		
まとめ	・身体での表現がとても印象的な回だった。 ・子どもたちの中にあるイメージが表に出せる表現あそびは、今後の活動にもどんどん取りいれていきたい。		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑦

慶徳小 昇降口の空いている空間をお借りして 14:00～15:00

活動日	2016 年 5 月 4 日		
参加人数	子ども10名 ボランティア大学生1名	スタッフ数	5 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①集まった子どもたちと座る 最初、緊張して座っている子がいるので、その子ども達と、新しい座り方を遊びながらの始まり。</p> <p>②自己紹介(こちら側の) 名前当て</p> <p>②ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し (一人、大学生の子にも入ってもらう) 聞く→ステレオ</p> <p>③動いてあそぼう 輪になって座る(誕生日順) よばれてとびででジャジャジャーン ・昭和生まれ・平成生まれ・学校が始まってほしい ・最近疲れてる・給食が好き・走ることが好き</p> <p>発信(輪になった状態で)</p> <p>④紙芝居(ぐれっちゃん)</p>	<p>ゴールデンウィークの中、子ども達は親子で県外に出ている家族が多く、人数少なめ。しかし、残っている子ども達は、体育館でゲームをしていたので、誘い出すと、全体で10名くらい集まった。</p> <p>①② 最初、恥ずかしくて、周りから声をかけるだけだった子どもが、ボランティアの仲良くなった大学生がいることもあり、だんだんと遊びの中心に入ってくる。</p> <p>③ みんながいろいろなテーマを自分から出して遊んだ。学校がもうすぐ始まる時期になって、子どもたちから「学校にいきたい」という言葉が出ていた。</p> <p>④ あそんだ後、集中していた。</p>		
スタッフ 感想	・今回あそんだ空間が自分自身の、地震後 4 月 30 日まで避難し、生活している空間だった。とても大変な避難生活だったのだが、また改めて遊ぶことで、安心する空間に感じた。それは、子どもたちも同じなのではないだろうか？		
まとめ	・ゴールデンウィークだと、子ども達との遊び活動は難しいかと思ったが、そのようなことはなく、人数が少なくとも遊びの中で思いをたくさん出せるということが、一人一人が安心することに繋がると実感した。		

(写真)写真記録なし

「もっとあそび隊」活動報告⑧

詫麻原小校区 空いている部屋をお借りして 11:00～12:00

活動日	2016 年 5 月 6 日		
参加人数	小学生 24 名	スタッフ数	5 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①集まった子どもたちと固まって座る</p> <p>②自己紹介(こちら側の)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフの名前当て <p>②ほぐしあそび</p> <p>みる→ガムテープ後ろ回し (1 回目大人、2 回目子ども)</p> <p>聞く→小さくなる声</p> <p>③動いて遊ぼう</p> <p>よばれてとびでてジャジャジャジャー</p> <p>3チームに分かれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームごとに縦1列に並ぶ。 <p>ラインナップ (誕生日順・名前のアイウエオ順・今朝起きた時間)</p> <p>④暗号解読</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つのチームそれぞれに「宝の言葉」を決める ・一人3枚の折り紙を渡す。 ・一枚に一つ「宝の言葉」の手がかりを書く。 ・一斉に他のチームの人とジャンケンで、その手がかりを集める。 ・手がかりを元に、他のチームの「宝の言葉」が何なのか、解読する。 	<p>10日からの学校再開が決定し、熊本大学の学生さんが、10時から子どもたちの勉強を見に来ていた。</p> <p>①～③</p> <p>勉強をしている子どもたちが、高学年が多かったので、集まった子どもたちは3年生以上が多かった。かなり「何をするのかな」という緊張した雰囲気ではあったが、だんだんとあそびの空気になり、③の時には、一人一人から手が上がり、いろいろなテーマが出ていた。</p> <p>「16 日の地震の時に起きなかった人」というテーマで動いた子には、思わず拍手が起きた。</p> <p>④</p> <p>「宝の言葉」というテーマに、子どもたちも大人も、決めるのにとても時間がかかったが、今だからこそ選んだ言葉が出てきた。</p> <p>「思い出」/みんなのもの いつもの時間 「くまモン」(前日より活動再開) /元気が出る 喋らない 「缶詰」/珍しいものもある サバ</p>		
スタッフ感想	<ul style="list-style-type: none"> ・甘えてくる子の様子がとってもくつついてくるので、今後とも遊びが必要だと感じた。 ・今だからこそ出てくる言葉や表現が多くあるように感じた。 		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年の子ども達が多く、知恵を使うあそびの中での表現が印象的だった。 ・支援活動でも、みんなに同じようなあそびではなく、対象によって、今どんなことで体も心も頭も使うことが面白いのかを判断していく必要性を大きく感じた。 ・面白さでの満足が、一人一人の安心感に大きく影響をしているように思う。 		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑨

帯山西小学校 空いている部屋をお借りして 10:30～11:30

活動日	2016 年 5 月 9 日		
参加人数	子ども 35 名 大人 10 名	スタッフ数	4 名
活動内容	参加者の様子		
①集まった子どもたちと座る ②自己紹介(こちら側の) スタッフメンバーたちの名前を当てる。 ③ほぐしあそび みる→ガムテープ後ろ回し きく→ステレオ ④動いて遊ぼう 輪になって座る(誕生日順) よばれてとびででジャジャジャーン 見つけてタッチ ⑤折り紙宝さがし 2つのチームに分かれる。 一人1枚の折り紙を3つに分ける(好きな形にちぎる) 部屋に隠す 相手チームの隠した折り紙を見つけ合う。 ⑥折り紙花火	明日より学校再開。 子どもたちもとても嬉しそうにしているのが、 見ているだけでわかる。日常が少しずつ戻っ てきている様子。 ①～③ とにかく人数が多いので、みんなで共有しや すい遊びを取り入れていく。 大人数ではあるが、一人一人がよく言葉を出 し合い、また話も聴きあう中で楽しんでいた。 ④ 「明日からの学校が嬉しい」、「地震で起きな かった」など、今の自分の実感に近い言葉が たくさん出ていた。 ⑤⑥ 思いっきりやりたいことを仲間とできる！ ということがとにかく嬉しいという様子。仲間 同士で体を寄せ合ってたくさん相談をしてい いた。		
スタッフ 感想	・明日から、日常が一つ戻ってくる。これからまた子どもたちのストレス等も出 てくる時期になるだろう。 ・ここに参加した子どもたちが、少しでも日々を安心して過ごしてくれることを願 うばかりだ。		
まとめ	・地震後、23 日から始まった活動。今後も続けていく必要を強く感じる。 ・できる限りで良いので、子どもたちが自分たちで生み出すことが面白く、また 安心して遊べるのだという実感を多く積み重ねてほしい。		

写真記録なし

この活動の後、7月に「日本財団 平成28年熊本地震 NPO・ボランティア活動支援事業」の助成が決定。9月からの放課後活動を始める。

4月23日から5月8日の活動の内、⑥、⑦、⑨の活動を助成金対象活動とする。

6. 西原村での活動報告(6月23日～1月28日)



関わったスタッフ数 のべ 12 名

のべ参加者数 96 名

(内訳)

子ども のべ 70 名

大人のべ 26 名

6月に入り、市内の様子が少しずつ落ち着きを取り戻しつつあった。
以前より関係のある西原村の「文化創造館 風流」の吉岡さんとお会いする機会があり、状況を教えていただいた。
その中で、多くのボランティアさんが入ってくださっていることで、生活の再建や、片付けなどが少しずつではあるが動き出していた。
が、被害が大きかったということもあり、かなりの方が受け身の形で支援を受けている様子もあることを聞いた。

4月当初は、やはり被害が大きかったところへのあそび活動はなかなか入りにくい状況もあったが、今だからこそ、あそびの活動の中で、一人一人が思いを発揮し、主体的に動いていくことの必要性を実感できる支援が必要だと感じた。

乳幼児の親子さんがあそびの場が少ないことを受けて、乳幼児、小学生、学童と、数回にわたり活動させていただくことができた。

ご自身も大変な状況の中、西原村の多くの皆さんに場所をつないでいただいたり、スタッフとして動いていただいたり、支えられながら活動をすることができた。

「もっとあそび隊」活動報告⑩

西原村 山河の館 10:00～11:30(日本財団助成活動)

活動日	2016 年 6 月 23 日		
参加人数	乳幼児親子 7 組	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①みんなで集まる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の説明 ・子どもの年齢確認 ・お母さんたちの自己紹介(好きな飲み物) <p>♪朝のあいさつ (スタッフのウクレレに合わせて体を動かす)</p> <p>②イメージの導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・梅雨に入って、なかなか外に遊びに行けないから、みんなでお天気になるように、てるてる坊主ばあちゃんに、てるてる坊主をもらいに行こう！ ・大型バス→山登り(関わりあそび) <p>③てるてる坊主が大変だ！</p> <p>てるてる坊主がペラペラになっているぞ！みんなで元気にしよう！（ティッシュペーパーの変化をあそぶ）</p> <p>④てるてる坊主が元気になった！</p> <p>みんなで元気にしたてるてる坊主を、紐に吊るしてあそぼう！</p> <p>⑤おしまい</p> <p>飾ったてるてる坊主を眺めながら、お茶・お菓子をいただいて感想を出し合う。</p>	<p>① 最初は、緊張していて、部屋に入れない子もいたが、ほぐしのあそびになると、楽器の音などに興味を持ちながらあそび始めた。</p> <p>②③ だんだんと物語を共有しながらあそびが深まった。子どもたちが、落ち着いて、集中して遊びに向かっていく様子に、大人も笑顔が増えていった。</p> <p>④ 洗濯ばさみを紐につけて、てるてる坊主を吊るす。親子でゆっくり関わりが持っている様子が印象的だった。</p>		
スタッフ感想	<p>・子どもたちが、集中していく様子が、大人にとっての安心なのだとすごく感じた。ほっとする時間が必要。</p>		
まとめ	<p>・市内に比べたら、まだまだ日常に戻るには時間がかかると思われた。その環境の中で、「あそびに行こう！」と来てくださった皆さんが、「あ～すっきりした！」と帰って行かれたのは、本当によかったと思う。</p>		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑪

有機生活 15:00～16:30

活動日	2016 年 11 月 12 日		
参加人数	幼児 5 名、小学生 11 名 大人 4 名、お店の方 4 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①ウォーミングアップ ブルーシートに集まる。 スタッフ紹介クイズ(好きな食べ物)</p> <p>②ほぐし ・輪になって座る(誕生日順) ・よばれてとびでてジャジャジャジャー</p> <p>③仲間ふやしてあそぼう！ ・チームをつくる(4チーム) ・チーム全員の体で表現をして遊ぶ(7秒でテーマのものを表現する) ・お店の方に気づかれないように、チーム全員の力を合わせて(ひとり1回はペンを持つ)お店の人の顔と情報を紙に書いてみよう！</p> <p>④チームで書いた絵をお店の人に渡していこう！</p>	<p>①② 「次はどんなことするの？」と、受け身ではあるが、あそびに夢中になっていく様子が伝わってくる。</p> <p>② 何名かは、経験している子もいるので、自らの発言が多い。そのことが良い影響になり、いろいろな言葉が出てきていた。</p> <p>③ チームで、どうやって気づかれないようにするかを作戦を立てると、「買い物をする」や、ひっそり隠れて様子を見る、など、自発的な作戦を面白がりながら立てていた。描いたものをお店やさんに届けると、とても喜んでいただいたことが、子どもたちにとっても嬉しい様子が見られた。</p>		
スタッフ感想	・自分たちだけではなく、広がりあるあそびになれたことがとても良かった。子どもたち自身が、「知らない人」に関わるきっかけになったように感じる。		
まとめ	・協力をしてもらえる方が増えてきたことで、あそびの広がりも多く感じる。たくさんはできないかもしれないが、今後もこのような活動を継続的に取り入れていきたい。		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑫

河原小学校 学童 16:30～17:30

活動日	2016 年 12 月 7 日		
参加人数	小学生 27 名 職員 3 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>①ウォーミングアップ(体育館にて)</p> <p>・こんにちは！</p> <p>スタッフクイズ(怪我をした理由は何か？3択)</p> <p>・見る</p> <p>大人4人の背中の後ろを行ったり来たりするガムテープを、「ストップ！」と言った時に、誰の背中の後ろにあるのか、よ〜く見てみる。</p> <p>輪になって座る(髪の毛の長さ順)</p> <p>・よばれてとびでてジャジャジャーン</p> <p>・電子レンジでチン！おにごっこ</p> <p>②暗号解読</p> <p>2チームに分かれ、「宝の言葉」を決める。</p> <p>ひとり3枚の折り紙を渡す。</p> <p>一枚に一つ「宝の言葉」の手がかりを書く。</p> <p>一斉に相手チームとジャンケンをして、手がかりを集める。</p> <p>手がかりを元に、相手チームの「宝の言葉」は何なのか解読する。</p>		<p>①</p> <p>一度会っている子もいるので、どんな様子であそぶのかが、わかっている印象。最初から色々なことをしゃべりながら関わっている。</p> <p>②</p> <p>日常の環境での暗号解読なので、子どもたちが「宝の言葉」に選ぶものも、その実感が出てくる。</p> <p>女子→学童の近くに置いてある消化器(2本のうち、1つ)</p> <p>男子→動物図鑑の中から一つ選ぶ。</p> <p>解読がとても難しかった。女の子が悩んでいると、最初は「しめしめ」としていた男子たちが、図鑑のページを何となく教え始めたり、体でこんな形のもの！と表現したり、「当ててもらいたい」という気持ちも動いている様子。</p>	
スタッフ感想	・経験をしているからこそ、日常自分たちの場所だ！という安心感があるからこそそのあそびの展開になった。なかなか当たらない女子への男子たちの関わりがとても面白かった。文字だけではなく表現がいっぱいあった。		
まとめ	・「暗号解読」の枠に収まらない、あそびの広がりを感じた。		
	・だんだん、男子たちの表現を見ることが面白くなっている様子が印象的だった。		
	・「伝えたい」ことがあるからこそその表現の魅力を感じた。		

(写真)

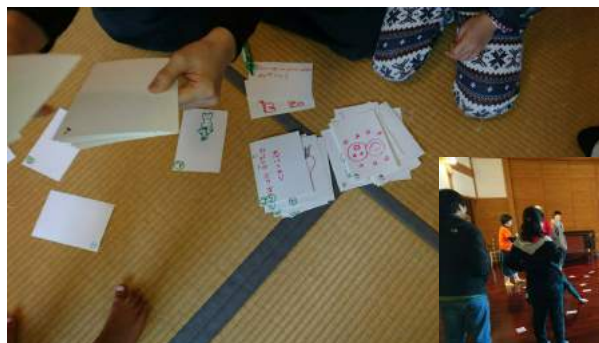
撮影不可のため写真なし

「もっとあそび隊」活動報告⑬

文化創造館 風流 14:00～15:30

活動日	2017 年 1 月 28 日		
参加人数	子ども 20 名 大人 8 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>「カルタをあそぼう」</p> <p>①ウォーミングアップ 自己紹介(全員)好きなお餅の食べ方 ・カルタとりあそび 輪になって座る→「コーヒー飲むのが好きな人！」など、テーマに当てはまる人は、カルタを取るような動きで、床を叩く。</p> <p>②カルタをあそんでみよう 2種類(昔話カルタ、日本史カルタ)を10枚ずつ選んで、チーム戦のカルタを一度やってみる。</p> <p>③自分たちのカルタを作ってみよう 50 音のカルタを、文章と文字、それぞれに自分たちのオリジナルカルタを作ってみよう！</p> <p>大人 VS 子どもで勝負！</p>	<p>① あそぶ気持ちでできている子が多く、初めての子どもたちも、その子たちから影響を受けて、どんどんあそびが広がっていくと感じる。また、一緒に参加している大人のみなさんも、「共に」という意識で参加していることで、全体の空気感がとても落ち着いている。</p> <p>② 混ぜたカルタ！ということに子どもたちがとても興味を持つ。大人は、子どもたちの方が意外と素早いことで、本気で勝負に挑む。</p> <p>③ 一度カルタをやっていることで、イメージがついているのか、どんどん書き始める。</p> <p>お店を探して行ってみたら、(地震で)閉店していた実感から</p> <p>「むかったら へいてん」 という読札と絵に、一同大笑い。</p> <p>印象的だった。</p>		
スタッフ感想	<p>・「むかったらへいてん」を笑い飛ばせることが今、とても大切のように感じる。実際、書いた子は、あの読札と絵を大切に持って帰った。その意味を受け止めながら、自分たちの活動を振り返りたい。</p>		
まとめ	<p>・あそびの中だからこそ、経験したことを負の感情ではなく、面白がりながら昇華していける、その実感がとてもあった。いつそのような表現が出てくるのかは、分からないが、この半年、継続してきたの力だったように感じる。</p>		

(写真)



7. 春日校区での活動報告(9月26日～3月27日)



関わったスタッフ数 のべ 33 名

のべ参加者数 162 名

(内訳)

子ども のべ 159 名

青年のべ 3 名

4月の活動から間をあけて、9月からの活動となる。

子どもたちは、少しずつ日常を取り戻しながら、生活も落ち着いてきた頃だったので、4月時点で感じていたような緊張感や、不安感は薄らいでいたように思う。

しかしながら、あそびの間でふと「あの地震の時、～」や「父さんも母さんも頑張りがったけんね～」など、地震当初のことを思い出したり、あそび活動中に余震があるとクッと表情を固めたりする様子は見られる。

日常の中でのあそび支援ということで、土日にイベント化した形ではなく、出来るだけ学校が早く終わる日などの放課後に活動を決める。しかしながら、子どもたちの日常というのは、放課後に部活、習い事、塾、などの日々であり、いかに日常の中で子どもたちが「やりたいことを思い切りやる！」場が少ないかということを実感させられた。

だが、活動を継続する中で、公文に通わなくてはならない子が、少しの時間だけでも参加できるように、公文の先生自身が「行っておいで」と、短い時間でもあそびに出かけさせてくれたことがある。また、学校の「地域の身近なお店屋さんインタビューをして発表する」という宿題で、「もっとあそび隊」取材してくれたこともある。

あそび活動においては、厳しい状況もあったが、地域の大人や、子どもたち自身の手で、「もっとあそび隊」の活動を自分たちの身近に、日常に配置してもらえたようで嬉しかった。

「もっとあそび隊」活動報告⑭⑮

おかえり～かぼちゃ公園 15:30～17:45

活動月	2016 年 9 月 26 日、27 日		
参加人数	26 日子ども 15 名 27 日子ども 12 名	スタッフ数	両日 3 名
活動内容	参加者の様子		
26 日テーマ「実りの秋」 ・ブルーシートの上に座る。 ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・新聞紙掴み取り合戦 ・新聞紙から収穫祭！（新聞紙の中の食べ物探し） ・新聞紙で食べ物作り ・2チームに分かれて、食べ物を隠す ・見つけあいっこをしたのちに、からだに隠して、どれくらい太らせることができたか？をあそぶ。	久しぶりに集まるので、最初は人数が少なかったが、あそんでいるうちに、たまたま公園に来た子が参加してきた。 体を思いっきり動かせる新聞紙掴み取りは、みんなが夢中になって全身を使った。 チームで食べ物を作り始めると、一気に集中のベクトルが変わり、黙々と作ることに夢中になった。自分が心を込めて作るからこそ、相手の作ったものも、大切に扱っていた。		
27 日テーマ「騙してみせるぞ大作戦」 ・ブルーシートの上に座る。 ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・新聞紙に潜って紛れる（昨日の隠しあいからの展開） ・新聞紙に折り紙・広告を追加して宝作りをする。 ・昨日のあそびを生かして、「騙し作戦」を各チームで相談して隠す。	部活等に出る子が多いため、昨日よりも少ない人数ではあったが、その工夫をすることを時間いっぱい使ってあそんだ。 新聞紙以外の素材が出た時に、その質の違いを比べてみたり、大きさを比べてみたり、特性を生かしながら隠しあいをする姿が印象的だった。		
スタッフ感想	・新聞紙だからこそそのダイナミックさを全身であそぶからこそその 27 日の展開だった。 ・子どもたちにとって、この場所が思い切り工夫できる場になっていけばいいなと思う。「騙し」という言葉の魅力が男の子は好きそうだった。		
まとめ	・少し落ち着いてきている時期とはいえ、全身を使う、何かに包まれる、というあそびを取り入れながら、個々の子どもたちが「ほっ」とする場を作っていきたい		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑯⑰

おかえり～かぼちゃ公園 15:30～17:45

活動月	2016 年 10 月 4 日、5 日		
参加人数	4 日子ども 12 名 5 日子ども 15 名	スタッフ数	両日 3 名
活動内容	参加者の様子		
4 日テーマ「警泥」 ・ブルーシートの上に座る。 ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・テーマの確認→題を決める 「世界を股にかけた泥棒」 ・公園の遊具に「イギリス」「アメリカ」など名前をつける。 ・警察に捕まらないように、たからを持って、違う国に行く。	警泥という、みんなもよく知っているあそびから入る。が、子どもたちの方から、「で、普通にはしないんでしょう？今日はどうするの？」と、あそびを作り変えることを面白がっている様子がはっきりとわかる。 遊具を色々な国に見立てる時も、色や形などから、イメージをしっかりとって、意味づけていた。		
5 日テーマ「警泥」その2 ・ブルーシートの上に座る。 ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・本日の警泥の題を決める→「泥棒海外逃亡編」 警察→国の文字数を決める（「4文字の国」など） 泥棒→一人一文字ずつ、ホワイトボードに書く （「アメリカ」など完成したら逃亡成功） 途中で捕まったら、牢屋に入れられる。 お助けあり。	昨日からの展開だったので、遠巻きに見ていた子も多く参加した。 ホワイトボードに一人一文字しか書けない、という制限が、子どもたちの作戦をより深める。また、国の名前を得意とする子が、みんなにとって、とても必要な存在になり、その子自身がとても生き生きしていた。		
スタッフ 感想	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたち自身が、工夫してみたくなっている、そのことをワクワクしながら求めていることを強く感じた。 ・一人ではできないことを面白がっている様子が多く見られた。 ・活動の中で、自分の得意がたくさんいかされると、「自分自身が役に立った」という実感が湧くのではないだろうか？褒められるよりも、あそびの中で、仲間に認められることがとても重要なように感じた。 		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・即興的に工夫することを、恐れず、面倒くさがらず、「やってみよう！」と面白がれる力を感じた。このあそびを繰り返す中で、突発的なことにも、「やってみよう！」と迎える力を育みたい。 		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告⑱⑲

りんどう公民館 おかえり～かぼちゃ公園 15:30～17:45

活動月	2016 年 11 月 14 日、15 日		
参加人数	14 日子ども 16 名 15 日子ども 12 名	スタッフ数	両日 3 名
活動内容	参加者の様子		
14 日テーマ「おかしな運動会」 ※雨天りんどう公民館 ・よばれてとびでてジャジャジャジャー ・お菓子を並べてみる ・チームに分かれて、お菓子とり借り物競争 ・チームで競技を考える→準備 ・考えた競技で「おかしな運動会」開始！ ・みんなで手に入れたお菓子を食べる 残った分は持ち帰る	「お菓子」という魅力で、子どもたちがたくさん参加してくれた。 身近なお菓子だが、チョコレートや、お煎餅など、その特色を良く観察しながら競技を考える姿が印象的だった。 お菓子をとても大切に食べ、持って帰る姿も印象に残った。		
15 日テーマ「おちばな運動会」 ・よばれてとびでてジャジャジャジャー ・昨日のあそびを振り返りながら、おちばだったどんな運動会が作り出せるのか、相談しながら作ってみる。 ・思い思いの競技を作り出す→準備 ・みんなでやってみよう！	昨日参加している子と、今日だけ参加の子どももいたが、イメージを伝え、「なるほど！」というように、自分たちならではの「運動会」を作り始めた。落ち葉の特性やこんなこともできるんだ！という新しい発見をとても面白がりながら工夫していた。		
スタッフ感想	・お菓子を使う＝食べ物であそぶ ではない、もっとおかしが貴重な存在になって運動会を作れたのが良かった。 ・子どもたちの工夫の展開がどんどん早くなっているのに驚く。		
まとめ	・お菓子がないとできない運動会、おちばだからこそできる運動会、それぞれの工夫の違いを2日間連続で取り組めたことが良かった。 ・子どもたちに、素材を受け渡す時の、大人の声かけは、「禁止」ではなく、その大人が、素材をどんな風に「大切」に思っているのかを語る事で、子ども達も大切に扱うようになっていく事を実感した。		

(写真)

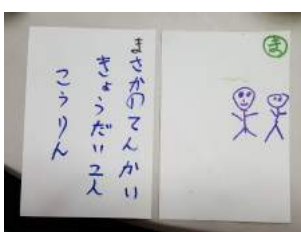


「もっとあそび隊」活動報告②①

おかえり～かぼちゃ公園 15:00～16:30

活動月	2017 年 1 月 5 日、6 日		
2 日間合計 参加人数	5 日子ども 16 名 6 日子ども 21 名	スタッフ数	両日 3 名
活動内容	参加者の様子		
5 日テーマ「カルタをあそぼう」 ・自己紹介(全員)好きなお餅の食べ方 ・カルタとりあそび(日本の歌カルタ・日本史カルタ) ・自分たちのカルタを作ってみよう 50 音のカルタを、文章と文字、それぞれに自分たちのオリジナルカルタを作ってやってみよう！ ・隠しカルタ(カルタを空間に隠して、読札を聞いて探す)	冬休みだったのも、子どもたちと時間の余裕をしっかり持って遊ぶことができた。 参加者には、避難所で活動していた時以来の子どももいて、「久しぶり！」という一面もあった。カルタは身近なあそびの一つなので、そこに自分のアイデアを足せることが面白く、また表現になっていたように感じる。		
6 日テーマ「すごろくをあそぼう」 ・自己紹介 ・おつかいすごろく(既製品)を3チームであそぶ(あんたたちとはちがうのよチーム)(スーパーゲームズ)(キングボーイズと季節たち) ・今日だけのすごろくを作ろう！ 何のすごろくにするのか？ゴールはどんなゴールにするのか？担当をチームで分けて、内容を決める。 ・公園いっぱいすごろくをあそぼう！	昨日来ていた子も、一緒に参加したり、冬休み中に来ていた従兄弟たちも参加したりしたので、大人数であそんだ。どんなすごろくにするか？という提案に「人生の冒険！」と名付けた。どんなことがあってもゴールするんだ！という、ゴールが、「成人式」というのが子どもたちらしい。 反抗期の年齢(12 歳～15 歳)を担当した子は、「ガラスを割る」「わがママを言いくる」といった、今の年齢の中で想像できる「反抗」を思う存分書き出して、面白がっていた。		
スタッフ 感想	・すっかり作り出すことが文化になってあそんでいる。子どもたちが「人生」のすごろくと作ることに決めたのが面白かった。実感のある年齢を担当した子は、実話が入っていたり、未来を考えたり、とても創造性があった。		
まとめ	・初めて参加した人もいたが、とても初めての子とは思えないくらいに、みんなが生き生きと活動できていた。 ・継続の文化をこのまま絶やさないようにしたい。		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告②③

おかえり～かぼちゃ公園 15:30～16:45

活動月	2017 年 2 月 6 日、7 日		
参加人数	6 日子ども 15 名、青年 1 名 7 日子ども 15 名、青年 1 名	スタッフ数	両日 3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>6 日テーマ「まめまきをあそぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・新聞紙で豆作り(大きな豆→大豆になる) ・大豆に自分の「鬼」を書く ・さらに新聞紙で、「鬼大豆」にあてる豆を作る ・「鬼大豆」を木につるす。 ・「鬼大豆」VS 子ども大豆として、鬼大豆が落ちるまであてる 	<p>豆まきをしている子、していない子、それぞれいるが、自分の中の鬼では、真剣に書いている子もいた。なので、あまり、何を書いたかを共有するよりは、自分の豆を共有することで、子どもたちの心を吐き出せる環境づくりを意識した。「鬼大豆」を落とすことにはとても夢中になり、「壊す」「破く」「落とす」という破壊してみたい！という欲求を感じた。</p>		
<p>7 日テーマ「鬼をあそぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・鬼カードを書く「自分の鬼」 ・「鬼、おにごっこ」 <p>おにが「鬼カード」を引く。どんな「鬼」なのかによって、即興的に追いかけたが変わる。</p> <p>例)「嘘つき」カードが出た時 「俺、50数えてから追いかける」と明言。 だが、ヨーイドン！ですぐ追いかける(嘘をつく) ※逃げる側も、どんなカードを引いたのか知っているの、そのことを予測して逃げる。</p>	<p>昨日を受けて、「追い出したい鬼」を思いっきりあそびの中でたくさん表現できれと思った。そこで、鬼カードを引く、「鬼、おにごっこ」をあそんだ。即興的にルールを決める力が強い子どもたちが多いからこそできるあそびではあるが、「嘘つき」や、「サボる」など、マイナスなことが「鬼」としてならば許され、また面白さに展開できるということが子どもたち自身が「何度もやってみたい」と感じている根幹ではないかと思う。</p>		
スタッフ感想	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが、あそびの中で自分とたくさん向き合っていることを感じた。 ・遠巻きに見ている子も、あそびが伝わると、どんどん入ってくる雰囲気がとてもいいように感じる。 ・やりたいことを、やっている、という空気がとても良い。 		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・「嫌なこと」と、向き合うことが、あそびの中だからこそ面白がれるということが子どもたちの実感につながってほしい。昇華できる内容の表現あそびになっていた。 		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告②④

おかえり～かぼちゃ公園 15:00～16:30

活動月	2017 年 3 月 27 日		
参加人数	子ども 10 名、青年 1 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>テーマ「風船をあそぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よばれてとびでてジャジャジャジャー ・今まであそんできた振り返り ・やっぱり作ってあそぼう！「風船で何をする？」 飛ばす、割る、水を入れて膨らませる etc いろいろなやりたいことを組み合わせてみよう！ ・ねええ！風船王国 かぼちゃ公園の遊具に、風船王国を作る。 風船一つ一つに、「配役」がある。 王様は水が入っている。その周りを兵隊が守っている。裏側には、裏ボス風船がいる etc ・せめろ！風船王国 作った本人たちが、王国を狙って襲う。 襲いかたにも、それぞれの工夫がある。 王様を狙う、裏ボスを狙う。一発で3つの風船を仕留める。など。(1分くらいで陥落) ・風船花火を打ち上げる 	<p>年度内最後ということで、子どもたちと話をすると、「4 月からもあるのでしょうか？」と、いう声が聞かれ、今後継続の必要性を実感する。</p> <p>やってきたことの中であそんでもいいし、風船もあるという投げかけをすると、「う～んおにごっこも捨てがたいんだけどあ」「あ、風船で、なんか新しいこと考えればいいんだ！」というしなやかさを見せてくれた。</p> <p>風船で、王国を作る、というあそびの中で、「物語性」をしっかり持ち、自分たち自身の意見や、工夫を発揮することをとても面白がっている様子が見られる。</p> <p>王国を作るのに30分、陥落には1分足らずというあっという間の時間だったが、そのことを「意味ない」とか「もったいない」とかではなく、「やってみたい！」の気持ちいっぱいに見現化してあそんでいた。</p>		
スタッフ感想	<p>・「もっとあそび隊」の中で、一番回数も多く、継続を力にしていけた地域。子どもたちのしなやかさ、「今」を自分たちの手で作り変えていく力には、本当に感動した。今回が最後ではなく、継続していきたいと強く思う。</p>		
まとめ	<p>・継続してきたからこそその子どもたちの工夫を面白がる力を大切にしていきたい。また、学年が大きくなってからも、なんとか「表現」を面白がれる「あそびの場」を作っていきたい。</p>		

(写真)



8. 尾ノ上校区 での活動報告(1月25日～2月8日)



関わったスタッフ数 のべ 6 名
のべ参加者数 36 名
(内訳)
子ども のべ 29 名
大人 のべ 7 名

錦ヶ丘公園を使つてのあそび活動は、2017 年に入つて 1 月と 2 月の 2 回の取り組みだった。地震初期に回つた、東区方面の中でも、人数の多い地域ではあるが、小学校の時間割把握などに時間を要してしまったためである。

寒い時期とはいえ、初期の頃の活動をよく覚えていてくれた子どもたちが学校から、保護者の方が直接送りに来てくださったり、そのまま保護者の方も一緒にあそびに入ってくさったりしたことで、子どもたちがどんなあそびをしているのかを、大人の方とも共有できたことは大きい収穫だった。

地域の大人が子どもたちの様子を見やすい公園なので、あそんでいる様子を、遠巻きに見ている方や、近くまで来て、声をかけてくださった方もおられる。子どもたちのあそびを日常に！という活動の中で、地域の大人の方の関わりがあるのは、とても力になるし、子どもたちの安心感にもつながるように感じている。

「もっとあそび隊」活動報告②

尾ノ上地域コミュニティセンター～錦ヶ丘公園 15:30～17:45

活動月	2017 年 1 月 25 日		
参加人数	15 名 大人 3 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>5 日テーマ「カルタをあそぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介(全員)好きなお餅の食べ方 ・よばれて飛び出てじゃジャジャーン ・カルタとりあそび(日本の歌カルタ・日本史カルタ) ・自分たちのカルタを作ってみよう <p>50 音のカルタを、文章と文字、それぞれに自分たちのオリジナルカルタを作ってやってみよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋いっぱい広げたカルタを思いっきり走ってあそんでみる。 ・「カルタで宝探し」 <p>外の空間も利用して、カルタを隠し、その札探しをしながらあそぶ。</p>	<p>初めて顔を合わせる子もいたので、ほぐしのあそびをたっぷりあそぶ。送迎にいらした保護者の方もあそびの輪に入っていたことで、子どもたちがより、安心してあそびに夢中になれていたように感じる。</p> <p>カルタ作りでは、一人ひとりが、こんなことがあったら面白い！ということや、こんなことをしたい！という「やりたい」がいっぱい表現されていた。一人ひとりの表現がみんなにとって大切なカルタになったことで一人ひとりが面白がれた要因のように感じる。</p>		
スタッフ感想	<ul style="list-style-type: none"> ・春日でもやっていたあそびではあったが、また環境と人が変わったらあそびの展開や、表現が違ってくるのが面白かった。 ・保護者の方も一緒に入ってくださったことが良かった。 		
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・地震当初から、間を空けての開催ではあったが、申し込みがあり、子どもたちが仲間を連れてきてくれたことが今後の可能性を感じさせた。来月もあるので、随時子どもたちが関わりやすい場になるよう工夫していきたい。 		

(写真)



「もっとあそび隊」活動報告②①

尾ノ上地域コミュニティセンター～錦ヶ丘公園 15:30～17:45

「もっとあそび隊」活動報告⑱

活動月	2017 年 2 月 8 日		
参加人数	子ども 14 名 大人 4 名	スタッフ数	3 名
活動内容	参加者の様子		
<p>8 日テーマ「鬼をあそぼう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よばれてとびでてジャジャジャーン ・鬼カードを書く「自分の鬼」 ・「鬼、おにごっこ」 <p>おにが「鬼カード」を引く。どんな「鬼」なのかによって、即興的に追いかけてかたが変わる。</p> <p>例)「わがまま」カードが出た時</p> <p>「〇〇ちゃん、鬼変わって！」とわがまを言う。</p> <p>※逃げる側も、どんなカードを引いたのか知っているの、そのことを予測して受け入れる</p>	<p>学校が終わるのと同時に、ワッと集まる。</p> <p>どうしても車でないと間に合わない子もいる。</p> <p>あそび始めると、集中してあそびに向かう。</p> <p>「鬼」を書く、という時間は、本当に真剣に書いていた。学校でも書くのだと思うが、大人が感じている以上に、子どもたちは日々から自分の課題について感じているように思う。</p> <p>また、あそびの中だからこそ、「鬼」が許されたり、自分もそういうことある！と、思わず呟いたりすることが、子どもたちの中で面白さに変わっていく様子だった。</p>		
スタッフ感想	<p>・子どもたちの素早さに、大人スタッフとしても本気で知恵を絞らなければ捕まえない！子どもたちにも「本気」であそぶという感覚が伝わっていったように思う。</p>		
まとめ	<p>・初めての子もいたが、経験している子どもたちが、どんどん仲間として引き入れる力があるので、安心感がある。子どもたちのこうしたしなやかな力や、その力こそが「今」のことに向かう大切な関わりの力なのだと意識化していきたい。</p>		

(写真)



9. スタッフまとめ

それぞれの現場に入ったスタッフ人数(助成金対象のみ)…のべ 53 名
(西原村スタッフ)

●熊本地震が起きてから、いや、それ以前から子どもたちの「あそび」に変化が起きていると感じていた。ゲームやスマホの普及で、子ども自身の体や心や頭を使ったあそびが激減している。

地震後には、様々な子どもたちへの支援が行われ、大変ありがたく思っております。しかし、大人数への支援となると、いわゆる「イベント型」で、楽しいことがすべてお膳立てされていることが通常となりますが、そういった支援に慣れてしまうと、「行けば楽しいことがある」と受け身になってしまう…。ゲームなども同じことが言えます。「受け身」な子どもたち…。本来は子どもたちにたくさんの可能性があり、極端に言えば、「そこに広場がある」だけで、子どもが数人集まれば、あそびが生み出される。そんな「子どもの可能性」に焦点を当てられたのではないかと思います。

●「体感」があるあそびを、体全部で感じられる場を今後も作っていきたい。

●初期の頃の子どもたちの浮いたような状態から、だんだんと落ち着いてくる様子が忘れられない。あそびの中、だけでなく、生活の中で、子どもたち自身が「やってみよう」と口にすること、そして色々な状況に葛藤があるかもしれないけれど、折り合いをつけながら具現化していく、そのことが子どもにとってだけでなく、大人にとっても、心の再構築、「復興」になるのではないかと思います。

●子どもだけでなく、その場にいる大人も巻き込んであそべたことで、「ほっとした」という感想を多くいただいた。自分の表現があそびの中で認められた時、心から安心するのだと、自分自身にも感じた。

●表現あそび、ということが、いまいち自分でも不安な中スタッフとして関わったが、子どもたちのあそびから、スタッフである自分自身も引き出されているような感覚があった。あそび合う、という場を今後も意識して作っていきたい。

(春日校区スタッフ)

●活動の充実と、課題が残るが、今後の継続も視野に入れて活動をしていきたい。また、自分の地域での防災にもつながる活動だと実感している。

●そうでなくても、安心安全のあそびの環境が減少していく中、熊本地震後、子どもたちのあそび環境は激変してしまいました。しかし、安心安全の環境があれば、子どもたちは持っている才能を開花させ、楽しくおかしくあそび、成長できるのだと改めて実感しました。

●ゆるやかで、和やかで、そして楽しい。「もっとあそび隊」はそんな場所になっていたように思う。皆で一つのあそびにひと工夫も、ふた工夫もしてみたり、部活前にギリギリまであそんで行く子がいたり、じ〜っと見ていた高学年の子どもたちに声をかけたら、一緒に交じってあそんでくれたり……。数回のスタッフ参加でしたが、色々なことが思い起こります。子どもとスタッフが交じりあって、皆で「あ〜しよう、こうしよう」とあそんでいる雰囲気大好きです。まだまだも〜っとあそび隊！

●毎回の子どもたちの工夫に、スタッフ側としても負けない、というと違うかもしれないが、出てくる表現を受け止める、投げる、受け止めてもらう、を覚悟を持って行う感じがした。でも、その中には、子どもたちの不安があったり、興奮があったり、いろいろなものが詰まっている。今後も、活動の中で、子どもたちとのあそびの中にある、感情のやり取りを続けていきたいです。

●なかなか人数が集まらず、声をかけても、部活、塾、という環境の中で、諦めずに継続できたことが大きい。少人数だからこそ生み出されたこと、そして、もっと届けたい、まだ出会えていない子どもたちに、自分たち自身で何ができるのかが今後、私達が創っていかなくてはならないところだ。

●公園の目の前のアパートは、秋の終わりまで傾いたまま、そしていよいよ取り壊し、という中を子どもたちが走る、笑う、考える。そのことが、いかに地域を豊かにしたかと思う。日常にあるその声を、今後も響かせるために、より学びと実践を行っていきたい。

(尾ノ上校区スタッフ)

●震災後、大きな音や暗いところ、閉鎖された場所をおびえる子どもたちに少しでも心が明るく楽しく開放出来るようお願い、スタッフとして関わらせて頂きました。いつもの公園でちょっと変わった？自分たちで考えたオリジナル鬼ごっこやカルタ遊びなど、本当に面白く、もしかしたら、私たちが子どもの力を借りて震災で受けた心の傷を癒されたような…そんな気がします。あそびの力は侮れません！

●なかなか体が動かず、写真を撮る係や、見守る係のような立ち位置ではあったけれど、この活動の中で、子どもたちが「あそびたいんだ！」としっかり要求を出していたことが実感として残ります。要求を、大人がどう受け止めていけるか、今後が課題です。

●「ケア」を表記があると、子どもが、それだけで緊張していたり、「支援」とあると、受け身になったりする中で、子ども自身の心をしっかり揺らしてあそべることに、とても大きな意味があったように感じる。ケアだから、支援だから、ということを超えて、子どもたち自身が、自分の言葉で、自分の文字で、自分の感覚で表現を恐れず、表に出していいんだよ、という場を作り続けたい。



発行：子どものあそび研究会
NPO 法人あそび環境 Museum アフタフ・バーバン九州
〒860-0821
熊本市中央区本山 1-6-9 白木ビル 3F
発行日：2017 年 3 月 31 日